十　お笑いリサイタル

「どう。やってみない」
　腰に手を当て、仁王立ちのマネージャーがソファーに座った二人に向かって微笑んでいる。
「いたよ、いないよ結成三十周年記念お笑いリサイタルよ」
　誇らしげな顔のマネージャー。
「そうなんだ」
「忘れていた」
「三十周年なんだ」
「高校を卒業してからすぐだもんな」
「あれから、三十年か。早いものね」
　いないよといたよ人形が感慨深そうに呟いた。
「じゃあ。決定ね。スケジュールを押さえるわよ。今から、社長に話してくる。これから忙しくなるわ。いないよちゃん。リサイタルのネタは考えといてね。あっ、ごめん。いたよ人形じゃなく、いたよちゃんも一緒にね」
　マネージャーは「大変。大変」と叫びながら控室から飛び出して行った。互いの顔を見つめ合ういないよといたよ人形。
「どうする、いたよ」
「どうするって、やるしかないじゃないの。いないよ」
「大丈夫？」
「わかんないけれど、やるしかないじゃない」
「わかった。やろう」
「そう、やるのよ」
　こうして、いないよといたよはコンビ結成三十周年記念お笑いリサイタルに向けて、準備を始めた。

「まず、ネタは何から始める？いたよ」
「そうね。三十周年だもの、あたしたちの軌跡よ。これまでのネタやギャグを全部網羅するのよ」
「でも、最初の頃は全然受けなかったわ。そんなネタもやるの？」
「やるわ。あたしたちの全てを出しきるの。さらすの。あたしたちが歩んできたことと、お客様の人生を重ね合わせるの。あたしたちの成長をお客様に全て見てもらうの。そうすれば、お客様にも喜んでもらえると思うわ」
「わかった。やろう。じゃあ、最初は可愛子ちゃんネタね」
「あれやるの？あれ、全く受けなかったね」
「今さっつ￥き、全部さらけ出すって言ったじゃない。確かに、あの頃、あたしたち、自分を出すのが恥ずかしかったじゃない。自分を隠して、作りものの自分を出そうとしたから受けなかった

のよ。かっこつけすぎたのよ」
「そうね。お客様はよく知っているわ。借りものじゃ、笑ってくれない」
「時事ネタもやったね」
「あれも受けなかった。どう見ても、あたしたち、時事からほど遠いもの」
「そうよ、あたしたちババだから」
「いいえ、あの時は、れっきとしたギャル」
「ギャルじゃなくてギャグじゃない。あたしたちの笑いは井戸端会議の延長なのよ」
「今でいう、女子会よ」
「女子会というよりもおばん会ね。でも、あの頃は、ぴちぴちで、二人とも若かったわ」
「いないよは今でも、服がぴちぴちじゃない」
「ほっといて。いたよだって、化粧クリームのつけすぎで、肌がびちゃびちゃやったで」
「あっはっはっは。そうそう。お互いが本音で言い合えるようになってから、お客様に笑ってもらえるようになったんだ」
「化粧をしない、本音トーク。半分本気で、半分ジョーク」
「それ、イヤミ？」
「ううん。それが、あたしたちの持ち味なのよ」
「持ち味というよりも、それしかなかったのよ」
「そうね。それしかなかったから、必死だった」
「顔は笑おうとしたけれど、こわばりは隠せなかった。その必死さが、今につながったのよ」
「これからも、ずっと一緒よ。いたよ」
「もちろんよ。いないよ。ちょっと、しゃべり疲れたから、休みましょう」
「そうそう。さっきからおしっこちびりそうで、困っとったんや。ちょっと、失礼するで。ほな、さいなら」
　いないよは、いたよ人形をテーブルの上に置くと、トイレに向かって駈けだした。
「もう。いないよったら、昔も今も全然変わらないんだから。まあ、それがいいことだけど」
　いたよ人形の髪が自然と持ち上がる。やばい。と、思うものの、自分にはなすすべはない。
「もう、近いな」いたよはポツリと呟き、目を閉じた。

「さあ、いくで。いたよ」
「もちろんや。いくよ」
　舞台の袖で、二人は互いに目を合わせる。「いよいよ、いたよ、いないよのコンビ結成三十周年記念お笑いリサイタル」が始まる。お客様は一杯だ。だが、みんな二人のお笑いを期待して、会話を控え、会場は静寂に包まれている。二人に緊張感が走る。虎のパンツの柄の緞帳が上がっていく。二人からの特別注文だ。虎のパンツは、虎の穴ならぬお笑いの穴の象徴なのだ。それを見て、お客様は笑うが、二人には来し方の三十年のお笑いの軌跡が頭の中を駆け巡っていく。
「さあ、お待たせいたしました。「いたよ、いないよの三十周年記念リサイタル」の始まりです

。皆さん、拍手を持って、二人をお迎えください」
　司会者はマネージャーが自ら買ってくれた。気心の知れたマネージャーだ。安心して任せられる。
「さあ。出番ですよ」舞台監督の山ちゃんがキューを出す。そいて、いないよの肩を叩いた。みんな、勝手知ったる昔からの仲間だ。家族だ。
「よし」「よし」
　気合を入れて、舞台に駆けだしたいないよといたよ人形。衣装は、いないよが結婚式の白いドレスで、いたよ人形は赤いドレス。ただし、いないよの靴は動きやすいようにランニングシューズ。ドレスは床まで届いているので、お客さんからは足下は見えない。いないよが歩くたびに、お掃除モップのように床を掃く。だが、それが災いした。
「あっ」の叫び声とドスンと倒れる音とともに、いないよが舞台に這いつくばる。何がどうなったのかわからず、ただ目を丸くするいないよ。ただし、いたよ人形は無事に左手に握っている。会場からは爆笑の笑い。いないよがギャグで転んだものと思っている。
「何、ギャグしてんのん。早く起きてよ。いないよ」いたよが笑っている。ようやく、いないよは自分が転んだことに気がついた。足先がドレスの裾を踏んだのだろう。全くドジなあたし。この記念お笑いリサイタルの出番で転ぶなんて。もう、何が何だか、どうしたらいいのか、わからなくなった。転んだまま硬直し、じっと動けないいないよ。もちろん、司会のマネージャーも舞台監督もいないよがわざと転んだものと思って、お客さんと一緒になって肩を揺らして笑っている。
　いたよはいないよの顔から血の気が引いて、真っ白になっていくのを見た。やばい。いないよはわざと転んだんじゃないんだ。なんとかしないと。あたしがなんとかしないと。いたよはいないよに小さな声で囁く。もちろん、大きな声を出してもいないよ以外の人間には聞こえないのだが。それだけ、いたよもあせっていた。
「さあ。いないよ。あたしの言葉をしゃべって」
　ようやく、いないよもこのままじゃ駄目だと認識した。でも、何をどうすればいいんだ。それがわからない。頭を打ったわけでもないのに、頭が回らない。
「お笑いを始めるのよ。さあ、いくわよ。今から、声に出して」
「うん」いないよは何とか声を絞り出した。いたよがしゃべる。同じ言葉をいないよもしゃべり始めた。
「もう、痛いじゃないの。早く起き上がってよ。いないよ」
　そうきたか。じゃあ、こうしゃべろう。
「ええ？人形のあんたでも痛いの？」
「もちろんよ。でも、もっと痛いのは心よ」心？心ってどういう意味？これからどう話をつなげるの。こんなネタはなかったわ。でも、こうなったら、お笑いのリードはいたよに任せるしかない。いないよも続ける。
「人形のあんたでも心が痛むの？どうして？」
「だって、ギャグを言う前に、あんたがすべってしまったじゃない」

　ここでお客さんの笑い声。転んだ後の、次のお笑いを期待していたのだ。そうか。そういう展開か。それならこう続けよう。
「どうせ、すべるんやったら、ほんまにすべった方がえええやろ」
　再びお客さんからの笑い声。この笑い声を聞いて、いないよはやっと心が落ち着いた。いける。ピンチはチャンスだ。マジに転んだことで、一時は頭が真っ白だったが、ようやくお客さんの心を掴めた。あんなに心配していたことが嘘のようだ。よし、これからだ。
「そうよ。これからよ」いないよの心の声を聞いたのか、いないよが励ます。いないよといたよのお笑い魂が噴火した。立ち上がるいないよ。一緒に立ち上がるいたよ人形。
「話が変わるけれど、最近、あんた鼻水がよく出てるで」
　いきなりのいたよのフリ。これもネタにはないフリだ。いたよ人形の顔が笑っている。あせるいないよだが、そこは三十年のキャリアと四十年近くのいたよとの仲と腹話術という一瞬の余裕。その間を利用して返す言葉を考えた。アドリブにはアドリブ返しだ。
「いくら転んだと言っても、話の転換が早すぎやで。あんた」
　ここでも観客の笑い。笑いとは現実からの遠い飛行だ。遠くへ飛べば飛ぶほど、笑い度は高まる。そして、現実に戻ってくることで、さらに笑い度は高まるのだ。これが、いたよ・いないよの笑いの目指すところだ。
「それで、その鼻水がどうしたん。いたよ。人間やから、鼻水ぐらい出るやろ」
「折角出た鼻水を飛ばして、虫でも撃ち落とせんか」
　いたよがまた変なことを言ってきた。いたよがどの方向に話を持っていこうとしているのか、今のいないよにはわからない。だが、何かを返さないとお笑いは続かない。
「あたしはカメレオンか」いないよがカメレオンの顔を真似て目を見開く。
「カメレオンは舌を伸ばすんや」
「ほなら、あたしはてっぽう魚かいな」今度は口を尖らすがらすいないよ。
「てっぽう魚は口から水を飛ばすんや」
「いたよ。あんた詳しいなあ。今日はお笑いやのうて、素晴らしき動物の世界かいな。お客さん、勉強になるやろ。ほなら、あたしもやってみよ」
　いないよが鼻の穴の片方を押さえ、お客さんに向かって鼻水を飛ばそうとする。
「こら。お客さんに向かって何すんのん。いないよ」
「カメレオンやてっぽう魚にできるんやったら、あたしにもできるやろと思うてなあ」
「カメレオンやてっぽう魚は虫を捕まえるんやで。あんたは何を掴まえるんや。ハエか、蚊か、ゴキブリか」
「あたしがどんなに喰い地がはっとると言うても、ハエや蚊、ゴキブリは食べへんで。狙いは財布や、財布」
「財布？」
「そや。舞台の上からお客さんに向かって鼻水を飛ばして、お客さんの財布に引っ付けるんや。その後、思い切り鼻を吸うと、鼻水と一緒に財布があたしの手元に届くんや。どや、すごいやろ」

「すごいやのうて、それは泥棒やで。いないよ」
「いや。泥棒とちゃうで。このすごい技に対する、お客さんのおひねりや。おひねりやったら、泥棒にならんやろ」
「おひねりを強制的に奪う奴がおるんかいな」
「そんな奴がおってもええやろ。誰を狙おうか」
　いないよが舞台の上をうろうろし、目星をつけたのか、あるお客さんを目がけて鼻水を飛ばそうとする。
「こら、やめんかいな」いたよ人形がいないよを止める。
「ジョーク。ジョーク。これはお笑いやで。あんた、人形になっても、首に青筋をたてるんやなあ。かゆわ。かゆいわ」いないよが自分の首筋を手で掻く。
「あんたやって、人間のままなのに氷山の一角の体型やで」
「ほっといて。なんでもドスンとかまえとかなあかんのや」
「ほんまや。ドスン、ドスンと舞台の上でしこを踏んどるわ」
「あたしは相撲取りか」いないよはいないよの言葉通りしこを踏み出した。
「ほんまにやらんでもええんや。あんたがドスンと言うたから、ちょっと腹びれをつけただけや」
「誰が魚や。それも言うなら、尾びれやろ」
「尾びれやったら、人魚になってしまうやろ。そんなクジラみたいな人魚はおらんわ。だから、腹びれにしたんや。どうや。ええやろ」
「何を自慢しとんのや。氷山から、今度は、クジラかいな。あたしの体はどうなっとんや」
「いないよちゃんは、いろんなもの変われて、ホントうらやましいわ」

「急に、ちゃんづけかいな。あんたは人形になっても口だけは減らへんな」
「そんだけ、いないよちゃんが人気者やいうことや」
「ほんまかいな。それ嬉しいなあ。いたよちゃんもええこと言うわ。口が立つと言うことはそれだけ頭がええ証拠や。ＡＱ二百と違うんか」
「それも言うならＩＱや。それでも、誉めてくれたらあたしも嬉しいわ」
「それにしても、お互い単純やなあ。ちょっと誉められたら、すぐに舞い上がってしまうわ」
「舞台だけに上がらなあかんのや」
「ええこと言うなあ。いたよちゃん。もう二度とあの世に登らんといてよ」
「わかってまっせ。これからもずっと一緒や」
「ずっと一緒はわたしらだけやおまへんで。お客さんも一緒や。三十周年だけでなく、五十周年や百周年も、二百回忌もお客さん、応援してよ」
「いないよちゃん。あんた、いつまで生きる気や。それに、二百回忌やいううたら、死んどることやで」
「そうやったんかいな。そう言えば、この前、おとうちゃんの七回忌が終わったとこや。忌やい

うたら、お祝いやと思うとったわ」
「あんたはほんまに長生きするで。それに今日来とるお客さんの中には、後何年持つかどうかわからん人もおるで」
「いたよちゃん。そんなこと言うたらあかん。何でも、ほんまのこと言うたらあかんのや」客席のお客さんを指差すいないよ。
「こら。お客さんに向かって指差してどないすんのん。あんたの方がきついで。いないよちゃん」
「とにかく、これからも「いたよいないよ」のコンビを」
「どうぞよろしくお願いします」
　二人は客席に向かって頭を下げた。お客さんからの拍手がホール中に鳴り響いた。

「もう、だめだ。髪が空に引っ張り上げられる」
　いたよは自分の髪を下に降ろそうと掴む。だが、同じように、手も空に引っ張られる。バンザイ。グリコのお手上げの状態だ。
　神様。もう少し、もう少し、待って。もうすぐ、三十周年のリサイタルが終わるから。それまで・・・。

　なんとか。なりそうだ。最初の出だしは想定のネタじゃなかったけれど、いないよの機転で受けた。このまま続ければいいんだ。やっぱり、いたよのおかげだ。表向きは腹話術お笑い。でも、実際はいたよとあたしの二人のお笑い。いたよがしゃべるのを、ただ、あたしが腹話術のように見せかけて、しゃべっているだけだ。自分ひとりでは、こんな突っ込みはできない。元々、あたしはボケだ。だから、上手くいっている。今回のリサイタルだけじゃなく、このまま、このまま、ずっと、いたよとお笑いを続けたい。